

ローマ滞在期のジャン＝バティスト・カルポーについて

大屋美那（国立西洋美術館）

ローマ・フランス・アカデミーの改組にともない1797年に始まったローマ賞制度では、受賞者はローマ校いわゆるヴィラ・メディチに寄宿し、毎年、その年の課題作品をパリに送ること(envoi)を義務として、最長4年間同地で制作する権利を得た。彫刻部門ではローマで古代彫刻を複製し、それをパリに送ることにも重きが置かれていた。しかしながら、19世紀中盤、パリでは社会の近代化とともに美術にも保守主義と一線を画す新しい動きが生まれる時代。こうしたローマでの複製制作の意味も変わってきたにもかかわらず、社会的成功を目指す若き彫刻家たちは、ローマで制作することに依然として固執していた。今回発表の対象とする彫刻家ジャン＝バティスト・カルポー(1827-1875)は、1854年に《ヘクトルとその息子アステュアナクス》によりローマ賞を受賞し、1856年1月より奨学金を受けローマに滞在、その後、体調を壊しパリに一時帰国するも、1861年まで同地で制作を行った。カルポーはローマ滞在中、ローマ校より与えられる課題への反発や校長との確執、経済的な困難に加え病気の悪化もあり、彫刻制作から長く離れることもあった。しかしながら芸術家としての将来のため滞在中を続けることを選択し、結果として滞在期間中に《貝をもつナポリの若い漁師》と《ウゴリーノ》を完成させている。ローマ校で厳しく規定された主題や構成、サイズを意識しながらの両作品の制作には、カルポーのアカデミズムへの遵守と抵抗の両面を見ることができる。他方で、これらの彫刻はいずれもカルポーのローマ滞在中からすでにサロンや批評界で評判となり、彫刻家カルポーの名は広く知られることとなった。

カルポーは生涯を通じ多数の素描を描いており、現在それらの多くはヴァランシエンヌ美術館、ルーヴル美術館素描室などに保管されている。とくにヴァランシエンヌ美術館に所蔵された約100冊にも及ぶ素描帖にはイタリアで描かれた多くの素描が含まれるが、これまでほとんど調査がなされていない。本発表では、これらの素描や手紙、同時代の批評を分析し、《貝をもつナポリの若い漁師》と《ウゴリーノ》に至るローマ滞在期のカルポーの活動を跡づける。古代彫刻やルネサンス芸術が威光を放ち、街角にはノスタルジーさえ漂わせる19世紀のローマは、国際都市として多くの外国人芸術家が集まる場所でもあった。カルポーと同時期には、ローマ賞受賞者だけでなくモローやドガなども独自にローマを訪れ、ヴィラ・メディチを中心として強いフランス人芸術家のコミュニティを形成していた。カルポーとモロー、ドガとの直接の交流を示す資料は見つかっていないが、周囲の状況から判断すると知り合っていた可能性が高い。本発表では、とくにドガにおいてそうであったように、カルポーのローマでの活動を単に初期制作やアカデミズムという枠に片付けるのではなく、そこに後の展開にもつながる近代性を見出すことを目的とする。